

---

# 愛しい日々

黴菌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛しい日々

### 【著者名】

Z5501A

### 【作者名】

黴菌

### 【あらすじ】

あなたに…聞こえてる…あなたと過ごした愛しい日々は今も大切な宝物。ずっと死ぬまで忘れない。だって…あなたを今も愛してるから。

## プロローグ

あなたと過ごしたほんの少しの嬉しい日々。

今でも宝物だよ。

あなたは今も…笑っていますか??

## 第一話・出発

あれは10年前の事だ。

高校の授業をサボつてここで寝ることが好きだった。

成績はそんなに悪くないから、いつも先生は田をつぶつてこな。

俺はもう少しで深い眠りに墜ちようとしていた。

「…こんな所で何やってんの…? ?

俺は女子の声に田を覚ます。

そのまま田をあけると…見覚えのある顔が見下ろしていた。

確か… 相沢佳奈。

学校内で噂の美少女だ。

「パンツ見えてるよ。」

寝そべっていたので彼女のスカートの中が嫌でも目に入った。

「えっ！？ ちょっと勝手に見ないでよ（汗）！ ハッチー！（笑）」

そう言つて彼女は焦つてスカートを抑えた。

まだ俺の視線からはピンクのレース模様が見えていたが、まんざらでもないので言わないでおいた。

「許可とつたら見てもいいんだ？？」

冗談半分で俺は言った。

君の焦つた姿が妙にかわいかつたから、からかいたくなつた。

「人によるねえー（笑）なんちゃってー（笑）」

笑うともうとかわいかつた。

「んで？相沢はなんでここにいるんだ？？」

「あつそつそう…森永 聰くん…！君を探しにきたのだよ…！」

相沢が笑顔で言った。

「なつ…何？」

俺はなんだか少し恥ずかしくなった。

「アド教えて？…ひょっと君には興味があるのや（笑）」

そういって相沢は自分のポケットから携帯を取り出した。

「ふむふむ。おっけえ 録音完了！今日メールするから（笑）バイ  
バイ」

そう言って相沢はピンクの下着をけりつかせながら去っていった。

俺は最後まで寝そべっていた。

寝そべると景色がいい事に気付いた。

## 第2話：メール

その夜、部活から帰ると相沢からメールがきていた。メールを開くのに妙に緊張して、見るのに十分程かかった。

件名：初メール 登録よろしく

こんばんわんこお 部活終わつたあ？？  
なんて呼べばいいかな？私は佳奈でいいよ

文字の一つ一つが相沢の顔を思いださせた。  
なんだかくすぐつたい。

自然と相沢の笑った顔が焼付けた目から脳へ送られてくる。

件名：今終わつた。

俺の事は聴でいいよ。

俺は何故かギクシャクしてしまって、一言だけのメールを送ってしまった。

送った後…すぐに後悔した…。嫌われたかも…。

件名：堅いよ！（汗）

聰なんか堅い！！タメなんだからもつとほがらかにい  
思つた以上に明るくカバーしてくれたのが嬉しかった。

そんな感じで俺達は眠たくなるまでずっとメールをしていた。

メールが返ってくるまでいつも俺は携帯を握つて待っていた。

そして着信音がなると餌をおあずけされていた犬のように、

携帯に食いついた。

件名：眠いい  
ZZZ

明日バスケの朝練あるからそろそろ寝るね

また明日

バイバイ

俺も十分眠かったがメールが終わるのは……残念だった。

件名：オッケー

俺も明日テニースの朝練があるから。んじゃおやすみ～～。

なんだかおかしな気持ちになつてそれを「まかすかのよう」に、俺は深い眠りにつこうとした。

しかし……眠かったはずなのに……メールをやめた途端に、相沢が今何をしているのか気になつてあまり寝付けなかつた。

自分に芽生え始めた感情の足音が…心の底で聞こえていた。

### 第3話・朝の学校では

翌日いつもと違つて早く目が覚めた。

すぐに支度をし、ラケットを持ってでていった。

学校に着いて、「コートに行くと……なんと誰もいなかつた。

そういえば……昨日コーチが朝練ないって……。  
しまつた……いつもあるもんだから勘違いしていた。

早く起きた事を後悔しながら、教室へ向つた。

誰もいないと思っていたが、一人だけ……机に俯せになつて眠つている人がいた。

相沢だつた。

俺は起こさないよう気につけながら歩いた。

しかしそれも虚しく、俺は机の脚につまづいてたましい音をたててこけた。

「つてえ…。」

右足の膝は擦りむいて血が出ていた。

「えっ！？ 聰何やつてんの！？ だつ大丈夫？？」

目を覚ました相沢はそいつて駆け寄ってきた。

「いいいや何も問題ないから（汗）」

そういうながら俺は倒れた机を戻していた。

「あつ聰つー血が出てるよーー早く手当てしなきゃ化膿しちゃうー！」

「保健室いこー！」

冷静な判断だつたが相沢は完全に焦っていた。

「大袈裟だつて（笑）こんなん舐めれば治るから。」

「ダメ！聰がよくても私はダメなの…はいつ肩貸してあげるから  
！行くよ…」

相沢は自ら俺の腕を自分の首にまわした。

そして頼りない足どりで歩き始めた。

「今日朝練なかつたんだねー。間違えちゃつた（笑）聰もだけどね  
え。」

「相沢もなかつたんだ（笑）」

「私の事は佳奈でいいつていつたじゃん…！」

相沢は頬を少し膨らませていった。

それがかわいくて笑いそうになつたがなんとか堪える事ができた。

「んじゃー…か…な?」

「聞こえないよーもつと大きな声でえ（笑）」

そういってからかった。

俺はその時、彼女への愛を自分から感じた。

「佳奈…好きだ。」

「えつーん。」

俺は自分がびっくりした。感情のままにその言葉を発してしまった。

「えつと今はね… の。」

言い訳をしようとした俺を佳奈の言葉が遮った。

「私も好き…だよ。付き合おうっ？」

「あつ…うん。」

俺は呆然として無意識に言葉を返した。

「良かったあ……。」

佳奈はそつこいつそのまま俺に抱き付いてきた。

少しだけ俺より短い身長が信じられない程優らしかった。

## 第4話・運命の日

ビリでもいる普通の恋人同士だった。

そう……あの日まで。

あの運命の日がくるまで。

俺達が付き合いだして何日か経った頃、佳奈は珍しく学校にこなかつた。

心配になつてメールをしても返つてこなかつた。

俺は部活を休んで佳奈の家へ行った。

この前一度遊びに行つた事があったから道は知つている。

佳奈の家に着いて玄関前のインターホンを何度押しても、反応はない  
かった。

すると一回の車が俺の前にとまつた。

佳奈のお父さんだった。

「君は佳奈の… のりなさい。」

俺は確かに胸騒ぎを感じた。

行き先もわからず俺は車に乗つた。

車は病院に着いた。

何故か予想どおりだった。

佳奈のお父さんこ着いていくと……一つの病室の前で佳奈のお母さんが静かに……泣いていた。

その姿は……俺の心拍数を更に上げさせる。

佳奈のお父さんは冷静を装っていたが今にも泣きそうだった。

人間のもうが……そこにはあった。

「聰君……落ち着いて聞いてくれ……。」

佳奈のお父さんがいつになく真剣なまなざしで俺を捕らえた。そのままなじしから……俺はもう逃げる事ができない。

「えつ……。」

俺はその言葉が異常に恐ろしかった。

聞きたくない……でも……聞かなくてはいけない。

後悔したって……。

その言葉が俺を壊したって。

佳奈のために……。

「佳奈はね……後1ヶ月しか生きられない。」

世界が……逆さまになつた……気がした。

## 第5話・涙

短い命に涙がでそつだつた。

1ヶ月…その単語一つが…佳奈の命。

「佳奈は昔から重い心臓病でね…昨日…状態が急変して…ドナーがいれば助かるんだが…見つからないんだ…。」

「なんでですか??なんで佳奈を助ける人間がいないんですか?」

わかりきつて…そんな理由は…。

「この世界には…佳奈のようにドナーがいなければ助からない人間がたくさんいるんだよ…。その数にドナーはついていけない。」

佳奈が心配になつてきた。

痛さで泣いているかもしない。

「佳奈には…知らせたんですか??」

「ああ…せっかくな…。」

佳奈は自分の命の残りに泣いているかもしない。

俺は一步踏み出して、重い病室のドアを開いた。

佳奈はいつものように笑っていた。

目が真っ赤なのに気が付いた。

「聰い！会いたかったあ！！病院つてつまんないんだも～ん。」

その元気なフリが…俺にとつて苦しかった。

「1ヶ月だろ？？」

俺は佳奈の命を言った。

「聰…蝉つてね1週間の命なんだよ。その間に人間に捕まっちゃうかもしねり。車にぶつかって死んじゃうかもしれない…。1日だけの寿命の虫だつている。人間はその何倍も生きれるのにね。私の残りは1ヶ月…聰…それは誰にだつてくる時間なんだよ？？だからね…泣かないで。」

俺は泣いてる事に気が付いた。

「悪い…明日またくるな…。」

そうつぶて俺は佳奈に背を向けた。

佳奈を見ないよ。う。

泣いている佳奈を見ないよ。

## 第6話・悪化

俺はその次の日も部活を休んで佳奈の所へ行った。

「あつ聰。部活大丈夫なの？？」

佳奈は前より割と元気だった。

「いいんだよ。佳奈が病院にいるんじやメールだってできねえもん。

「

「ゴメンね…。」

佳奈は重く謝った。

「いって。そりしたくてやつてるんだから。」

本当はキツかった。試合が近いのでダブルスでくる相手に迷惑を掛けっていた。

「ならいいけど……無理しないでね。」

佳奈は前と一緒に明るいが、たまにこんな風に暗くなる。

「まかしきれない感情が佳奈にはあるんだ。」

時間は無情にもどんどん進んでいく。

佳奈の命の残りを聞いてからもう一週間経ってしまった。

佳奈は自分の体が弱くなるだけ明るく振る舞った。

「佳奈…大丈夫か?」

「なんともないよ…これ位いつもの事だよ(笑)」

佳奈は最近よく咳こむ。

とても苦しそう。

「ゴホッゴホッ…う…」

佳奈の口からは…血がでてきていた。

それをおさえていた手も真っ赤だった。

「佳奈っつー!大丈夫か!?今誰か呼ぶからー!ー!ー!」

俺は病室を走ってでた。

出た瞬間運良く佳奈の担当の医者と会った。

「あのですませんーー相沢さんが……。」

…ナシ

佳奈の病室から何かが落ちる音が聞こえた。

俺は医者をおりて病室へ飛び込んだ。

佳奈が床に倒れていた。

「佳奈っつーー。」

佳奈に駆け寄ったが意識はなかった。

医者がきて……その後に看護婦が走ってきた。

そして佳奈は運ばれていった。

じめくへじて……応急処置が終わった様で佳奈は病室に戻された。

まだ佳奈は眠つてゐようだった。

「佳奈……後……23日しかない……。俺向してやればいいんだよ……。みーこーこんだよ……。

そう呟いた。

佳奈になげかけるような……独り言。

「……こんな……自分が無力だなんて……しらなかつた。」

「聰は…何もしなくていいんだよ…？私の側にいてくれるだけでいいんだもん。それだけで…私は笑っていられる。」

佳奈は二つの間にか起きていた。

「でもむづ…時間がないよ…佳奈の残り…少ない…。」

「聰…私怖いよ…。咳が酷くなる度…時計の針の音が聞こえる度…すごい怖い…。私の死が近付いてくる…。聰がいるだけで…本当にいいから…。」

佳奈の言葉は俺を世界中の誰より特別にしてくれた。

「あっ…がとう…佳奈…。」

「私のセリフとらないでよ～（笑）」

佳奈は涙を拭いながら笑ってそう言った。

## 第7話・欲しいモノ

それからまた一週間経つた。時間が過ぎるのがとても早く早い気がした。

後 16日。

ドナーはまだ見つからない。

佳奈の様態はどうんどうん悪化していった。

ついには…酸素を運ぶ機械がなければ呼吸できなくなつた。

自分で歩く事もできなくたつた。

時間は確実に近付いてくる…。

「聰…私達…。」

「ん?...どうした?」

「ううん...なんでもないや。」

最近の佳奈はいつもそうだ。

「佳奈今何が欲しい??それか...何して欲しい?」

「え? なんで?」

佳奈は自分の誕生日を忘れていたようだった。

いや……佳奈の誕生日は迎えられないから……今の内にせめておべだけ。

俺と佳奈が一緒に居れるこの時間。

「いいからいいから。」

「そりだな……聰のお嫁さんかな??」（笑）

酸素を送る機械のマスクをつけたまま佳奈は田を細くして笑った。

「佳奈。」

佳奈の気持ちは痛い程わかつた。

「あつ、『メン』ねー!（笑）無理だよねそんなの……。」

「佳奈、結婚しよう。」

「聰…ありがとうございます。明日にでも結婚したい…。聰と一緒にバージンロード歩きたい。聰じゃなきゃ嫌だよ。」

佳奈の心にもったその答えが幸福だった。

「聰…いつも急なんだから（笑）だから…好きだよ。」

俺は…田の前に立つてやうと思つた。

## 第8話・言葉

あれからまた更に一週間が経ってしまった。

急げば急ぐ程、時間は待ってはくれない。

後9日…。

明日は俺と佳奈の結婚式がある。

俺はまだ結婚できる歳ではないから…正式にではないが…。

結婚式は教会でする。

二人で忍びこんで…

俺と佳奈の二人だけでする。

そつ考えるだけでワクワクした。

「久しぶりだな…明日が早くきたらいいの。」

佳奈は弱弱しく病室のベットの上でほほ笑む。

佳奈は恐れていた。

明日がくる事を…。

自分の死が近付く事を…。

「明日の晩…11時に迎えにくるから。」

教会は病院のすぐ近くだ。

だから計画は立てやすかつた。

「うそ…。待つしる。」

そうこうして佳奈は何かを噛み締めるかのように戸を開じた。

「結婚…できるんだね？？結ばれるんだね？」

佳奈は戸を開じたまま…俺に尋ねた。

「うそ。やうだよ。正式には…できなこなび…。」

俺が結婚できる歳になつた時は……一人は一緒にないから。

「正式とか……関係ないよ……心が繋がれば……一度でも繋がれば……それで私は充分だから……」「

佳奈の言ひ意味がよくわからない。

「……佳奈? ? ? どういう意味? ? ?

「ううん……なんでもない……」

そう言つた佳奈の顔は……なんだか切なかつた。

## 第9話・一人の至福

明日の夜はすぐおとされた。

俺は約束の時間に着くよつて、早めに家をでた。

病院に忍びこむ事は簡単だつた。

それでも警戒しながら佳奈の病室へ向かつ。

真つ暗な病院は少し不気味だつた。

「あ...とじへ..」

前を田を凝りして見ると、佳奈が手摺にたよつて歩いていた。

俺は声が出そうになつたのを必死で戻し、佳奈の元に走った。

「大丈夫か？なんで待ってなかつたんだよ？？」

小声で佳奈に言った。

「ま…ちきれなく…て。早く行こう…。」

俺は肩に掛けていた鞄を首に吊し、佳奈を背中に乗せた。

佳奈の苦しそうな息切れが俺を急がせた。

病院を出て右に曲がり、少し進むと簡単に教会はあった。

この教会は今は使われておらず、いつも空いている。

しかし、いつもここを掃除しにくる変わった人がいるらしい、教会は古びた所が見あたらなかつた。

佳奈をズラリとならぶ椅子の一つに降ろし、鞄を床に置いた。

「佳奈……ドレスは手に入れれなくて……。」

そういって俺は鞄の中から真っ白なワンピースを取り出した。

「ううん……綺麗……聰……ありがとう。」

そう言って受け取ると佳奈は早速着替え始めた。

もううん俺は後ろを向いていた。

ポケットに小さな箱を忍ばせて……。

「聰……いいよ。」

振り返ると……白い肌に真っ白なワンピースを来た佳奈が優しく微笑んでいた。

「佳奈……綺麗だよ。」

そうこうと佳奈は恥ずかしそうに笑う。

「始め……よ？？」

そう言ひて佳奈は俺の腕に手をまわしてきた。

俺はそのままヒスコートして、佳奈と一緒にバージンロードを歩いた。

そして聖母マリアの描かれたガラスの前で立ち止まる。

お互に向き合って俺はポケットから小箱を取り出す。

「綺麗…。」

ダイヤモンドでもサファイアでもない。ただの銀色のリング。それは佳奈の一言でどんな物より美しい宝石へと変わる。

「聴…好きだよ…。」

そうつ言い合って佳奈は目を閉じた。

そんな佳奈の肩を両手で持ち、俺たちは初めてキスをした。

佳奈の震える唇を塞ぐよつて。」

長い長いキスだった。

唇を離すと佳奈は下を向き呼吸を整えた。

そしてもう一度…恋しそうにしていた唇が重なる。

今度は…佳奈の方から。

「聴…私幸せだよ…。」

佳奈がそう言つたよつた気がした。

時刻は既に1-2時をまわっていた。

佳奈の時間はまた少なくなつていく。

後一週間。

佳奈の命は時間に忠実だった。

## 第10話・乾かない足下

結婚してからもう5日たつ。

佳奈の時間はもう毎日とあわって……。

佳奈はもう限界だった。

本当に起きる事もできなーい。

声も…耳を凝らさなければよく聞こえない。

その日佳奈と一緒に一日中一緒に過ごした。

会話をせずずっと廊下にいた。

佳奈は一人で近付いてくる死をただ呆然と待っていた。

俺も話し掛ける勇気などなかつた。

佳奈の左手の薬指にある指輪が、太陽の日あたり輝いていた。

「あ……と……し……。」

佳奈が小さな声で話しかける。

俺は急いで佳奈の口元に耳を寄せた。

「なんだ? 佳奈? ?

「わたしたちであつてよかつた??」

桂奈が二つも途中であつた。

「あたり前だ。何言つてんだよ??」

「だつてわたしたちであわなかつたらあと  
しそんなかなしいかおしなかつた。」

俺は何も言えなかつた。

「うめんね、めんね、だから……」

佳奈は泣きながら叫び声をあげながら泣いた。

「わたしの」とわすれてね。

佳奈はそう叫んだ後、声にならない叫びをあげながら泣いた。

俺は佳奈に向かって何も言えずに、病室からでていく事ができなかった。

俺の俯く床は乾く事などない。

## 第1-1話：一か月後の世界

あの日からもう一か月も経つ。

今…あなたの墓石の前にいる……。

今も愛しいあなたの名前が無情にも刻まれている。

田を開じると思い出す。

あなたの声…。

あなたの笑顔…。

屋上で眠るあなたの寝顔…。

あなたにもらった銀色の指輪…。

あなたがしてくれた誓いのキス…。

私はあの時…今までにない程の幸せを感じた。

聰…あなたがいなくなつて…もつ一ヶ月経つよ。

今も鮮明に思い出せる。

聰が死んだ日。

聰が死んだ瞬間…。

私は…何もできなかつた。

聴を止める事ができなかつた。

聴がいなくて……私はこの世界に存在している……。

今……私は息をしていぬ……。

どうして??

あなたが居たから??

あなたが出会ってくれたから???

あなたに出会わなければ…私は違う人に恋をして…それで幸せを感じていたのかかもしれない……。

あなたは…私意外の人を愛して…私が死んでいくのにも気付かず…  
…幸せそうに笑つて…結婚していたのかかもしれない…。

それが…幸せだったのかも知れない…。

そしてあなたは今も…生きているはずで…。

私は一人で死んで行くはずで…。

聰が死んだ時……世界中の時計が止まつたよつた……気がした。

## 第1-2話・心臓

私の命の期限はもう明日まで。

一ヶ月は……私には実に早すぎた。そして……苦し過ぎた……。ほんの前  
感じていた長さとは違つて……。  
まさに相対性理論だ……。

聰は……こない。

仕方のない事だ。

私が忘れてなどと言つたから。

何……期待してるんだろ?……?

期待してみても無駄な事だ。

それは私が一番よくわかってるはずでしょ??

でも……聰

怖いよ。

自分の……死ぬ日がわかってるのって怖いよ。

私の時計が……正確な事も……。聰がいない事も……

暗闇が手をのばしてくる」とも……

「佳奈……」

いつの間にか開いている  
ドアの方を見てみると。

夜の暗がりの中にふらつく聰がいた。

「なん……で……？」

聰はフラフラしながら私のベッドの脇に倒れ込むよつこ座った。

「佳奈……。俺の……心臓を使ってくれ……。」

聰の……心臓？？

「な……に……いつ……んの……？？」

聰の言つ意味がわからなかつた。

「俺はもうすぐ死ぬから……。薬飲んだんだ。ドラッグじゃない……毒薬。もつ医者に話はつけた。」

月光に照らしだされた聰の顔は死ぬ前の苦しさとある決心がまじっていた。

「……な……んで?なん……で?？」

「もつ……もつ……意味がわからない。」

「俺が佳奈のドナーになる。」

聰の目は私を捕らえて放さず、弱弱しい音量で、力強い決意を、私に言った。

## 第1-3話・わりなひ

「ダ……メ……だ……よ。」

「俺が決めた……。佳奈が死ぬ事はない。佳奈は……俺達が出来て良かつたのか……って言ったよな?」

私は泣きながら懇の話を悔しそうに聞く。

「出合いなんて……誰にもわからない……。でも……あいつ……と俺は……佳奈を守るために生まれて……佳奈を守るために出来た。」

違つ……。

「う……が……うふ。」

「違わない。だから俺は佳奈を守る。それが俺の意思で……俺の運命……。」

そんなの勝手だよ。

「わ……たした……ちの……で……あいこ……うん……め……いなんか……いらな……い。わ……たし……さと……しに……こく……は……くされて……せ……かい……じゅうの……だれよつ……し……あわ……せ……に……な……れた。」

必死に聴き止めた。

たとえ手遅れでも……。

「ど……んな……お金……もち……よつも……な……んでも……持つてゐ……ひと  
よつ……も……。」（ア、ふく……だつ……た。）

流れる涙は止まる事を知らずに、枕を濡らしていく。

「だ……から……し……あわせ……になり……すがた……から……わ……たし……し  
んでも……かまわ……な……い。」

今なら心からやうと思える。

聰のためなら、死ぬ事も怖くはない。

「それ……なら……俺も……同じだ……。俺も……佳奈に……会つて……両想い  
になれて……幸せ……だつ……た。」

私は言い返せない。

悔しいけど……

聰の言つ事に間違いはなかつたから……。

「佳奈……戀してゐる……ずっと……だから……」

「 もよない。」

聰は……何も喋らなくなつた。

田を開じたまま……。

微笑んでる……。

私は泣きながら動かないはずの体を無理やり動かし……

ベッドから落ちるよにして降りて……

動かない聰の側にいく。

「 も……と……し……おも……て……わ……たし……も……とじが……いなき  
や……や……とし……じや……なきや……。」

私は居眠りをする聴を見る事が大好きだった。

でも…今は…いつものように聴の寝顔を見て笑えない。

なんで…??

聴… いんな氣持ちよもやつて… 駄つてゐのこ…。

私はビュッヒて涙を流すの…??

## 最終話・愛しい田々

田が覚めると……そこはまたベッドの上で……。

いつも胸の痛みは消えていた。

「佳奈……よかつた……。手術成功したのよ……佳奈生きてるのよ……」

お母さんが泣きながら抱き付いて来た。

私はただ呆然となすがままにされていた。

聴がない世界を……初めてみた。

いや……本当は聴は……私の体の中に入ってる。

私の血液を体中に送る役割を今も忠実に行っている。

それからもう一ヶ月も経つんだね……。

それから私は一ヶ月で退院した。

そして聴に会いにいった。

冷たい石に埋まつた聴に……。

聴……私達……本当に一緒になれたんだよ……。

私は心で聴に聞こえるように話を……胸に手をあてる。

聴の……私の鼓動を肌から感じる。

でも……あなたの笑顔も寝顔も……見れないのは……残念……。

あなたと喋る事ができないのも……3度目のキスができないのも……みんなみんな……淋しい……。  
この十年……そんな想いは消してしまおうと思つてた。

でも……あなたの命口が来るたび……私は泣く。あなたの墓石の前で……。

私が死ぬまでずっと一緒にいてくれる。

本当はこんな形を望んでいたんじゃないけど……。

あなたは……私の中に……一緒にいてくれる……。

もひ…あんな哀しい別れをする事はない…。

聰は今も私の中で生き続け、私に明日を『『えてくれる。

あなたは…今も私の中で鼓動をうち続けてくれる。

聰と過ごした時間…私の宝物…。

「聴…好きだよ…。」

今日をありがとう。

明日をありがとう。

出会ってくれて…ありがとうございます。

十年経つた今でも…  
この想いだけは変わらないから…  
聴…  
笑つて…

あの愛しい日々のよひに…。

## 最終話・愛して日々々（後書き）

最後まで読んでいただき誠にありがとうございます。少しあやふやな所がござりますが……持ち味だと思っていただければ嬉しいです。この話が気に入つた方は評価していただければたいへん嬉しいです。本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5501a/>

---

愛しい日々

2010年11月13日02時48分発行